

昭和五十三年一月十五日 ご講演

「人間釈尊の生涯」

東京大学名誉教授 中村 元 先生

ただいまご紹介にあずかりました中村でございます。久しぶりにこちらへうかがいまして、わたくしはお懐かしさに堪えないのでございます。

皆様にとりましてはまことに昔物語かもしれません。わたくしはこの和敬塾ができません。その昔を思い出しまして、今日、このようにご発展あられたことに深い感銘を受けているのでございます。

本日は成人の日でございます。しかもこの和敬塾におかれましては第二十三年の記念式典を行われられる。皆さんのうちの若干の方々は今度ご卒業になるそうでございます。まことにおめでとうございます。このおめでたいときにお招きにあずかりまして、本当にわたくしはうれいのでございます。

ただいま理事長先生からルーツというお言葉がございましたが、そのルーツの一部分をかすかに存じあげている一人として、記憶をたどって述べさせていただきます。戦後まもないときでございました。鹿児島県の浄土真宗のお寺さんで、鹿児島県の教育委員もなさった方が、わたくしをお訪ねくださいました。

「東京に前川さんという篤志家がいらつしやる。この方の精神に打たれたから、自分はやばやながらご委嘱を受けて協力したい。あなたも一臂（いっぴ）の力をそえてもらいたい」と、おっしゃいまして、前川さんのお屋敷へうかがったことがございます。

小石川の、今でいえば富坂町のあたりでしようか。大きなお屋敷でありましたが、そこではじめてお目にかかって、そのご精神にわたくしも深く打たれたのでございます。資産家であらつしやるのに、大きなお屋敷を奥様とお嬢様のお二人ですべてなさっていらつしやる。本当にゆかしい生活ななさっていらして、そのお力を和敬会（和敬塾の前身）にむけていらつしやる

うかがいまして、心うたれたのでございます。その後、和敬塾をおつくりになられました。ときどき財団法人のご報告などもいただいております。途中でアメリカのスタンフォード大学が研究センターをここに置きまして、その方面の用件もございましてちよつとうかがったことがございますが、和敬塾の立派な建物のご完成になっておられるのうたれたのでございます（※昭和三十六年、昭和三十八年、スタンフォード大学日本研究センターが和敬塾内におかれた。その後、センターは国際基督教大学内に移転）。

それからまた何年か経ちまして、本日ががったわけでございます。最初にうかがったのは昭和二十三年か四年か、そのあたりでしょうか。皆さんから見ると本当に昔の物語、完全に一世代前でございます。その一世代の間にこのように立派にご発展になられまして、まことにうれしく思

ております。

ことに、よく言われますように今の日本は社会的に問題が多い。教育面においてもほかの国以上に混乱している面が顕著であると思います。これはひとつには、日本の歴史ではじめての敗戦を経験したのですから、敗戦のいろいろな影響があらわれていて、まだ正常化していないのは当然だと思えます。しかし、あちこちの大学を見ますと、どうも以前のことを知っている人間からみると、まったくでたらめをやっているとか思われなことが行われているんですね。わたくしは東大には長くおいていただきましたが、退いてからはもう一切、大学と名前のつくところは縁を切ろうと思つて、今日は大学とは無関係に仕事いたしております。

そういうつもりで見えておきますと、大学はでたらめかもしれないけれども、和敬塾のようなところできちっとした精神が伝えられている。皆さんが協力して、学徒としての道を進んでいらっしゃる。まことに喜ばしいことだと思つて、今日は喜び勇んでうかがったわけでございます。

さて、本日は何を申しあげたらいいか。これはご注文がございまして、釈尊、それ

も人間釈尊の姿を、この機会に皆さまにお伝えしてくれということなんです。

いわゆる「お釈迦様」については、仏伝というものがたくさんございまして、釈尊の伝記と称するものはたくさんありますが、ただ、そこには伝説がまといつております。ことに後代の人は、釈尊、ゴータマ・ブツダを神格化するあまり、奇跡譚みたいなことばかりつづっているんですね。そうすると、歴史的人物としての仏教の開宗者はどんな人だったかということ、これがわからなくなっているのです。それを皆さまにお伝えするように、というご趣旨だと理解いたしましたので、わたくしが検討して得ました結論にあたるものを、現代的照明をあてまして、皆さまにお伝えしたいと思つている次第でございます。

仏教の開祖は仏陀 (buddha) といわれておりますが、仏陀といえますのは「目覚めた人」という意味です。BDHという語根は「知る」「悟る」「目覚める」という意味であります。

我々は「無明」、迷いのなかでまどろんでおります。ウトウトとしているわけですね。はつきりしない。そこを、パツと目を開くように真理の眼をひらかせて、真理を

悟らせ、気づかせた人。自分も悟り、人も悟らせた人。それが仏陀であります。目覚めた人、また悟った人という意味にもなります。仏典では「覚者」という言葉を使つております。覚つた者。それが仏陀の意味であります。

英語で申しますとThe Enlightened One、ドイツ語ですDer Erleuchteteという訳語が使われておりますが、真理を悟つた人はみな「仏陀」と呼ばれているのです。だから「仏陀」は幾人いてもかまわない。

その使い方は、今日なお我々の日本語の中にも生きております。亡くなった人のことを「仏」というでしょう。たとえば、亡くなってお棺の中に遺体が安らつておられる。その人につきまして、「この仏は」という言い方をします。

その意味はこういうことです。その亡くなった人は、生きていたときにどういふことがあったかわからない、それはいろいろなことがあったかもしれない。けれども、亡くなってしまえば、この世のわずらい、穢れから逃れて、静かな境地に達している。仏様の境涯である。仏様のお慈悲に包まれている。そういう気持ちで、亡くなった人のことを「仏」というのです。

これは日本語独特の表現でありまして、

西洋の場合とはちがうんです。西洋では、人間は死んでもやはり人間でありまして、神になることはないのです。神と人間のあいだには絶対の断絶がある。だから西洋では、亡くなった人のことを「この神は」「このGodは」という言い方はしません。

ところが、日本は仏教的な観念を受けておりますから、「衆生本来仏なり」、生きていく人々みな本来仏である。迷い、悩みが去ったならば、仏になる。そういう観念、哲学的な理解が、根本にあるわけなのでございます。

ですから「仏陀」というのは理論上、幾人あってもいいのです。けれど、歴史上の開宗者、仏教の開宗者としての仏陀はひとりです。その歴史的人物のことを「お釈迦様」というんですね。なぜ「お釈迦様」と世間ていうかという、と、「釈迦」というのは開宗者であった仏陀が属していた部族の名前なんです。

まず、誕生の土地のことから申しませうか。インドがありますね。ネパールがインドの右上にあります。ヒマラーヤがそのあたりにずっと横たわっております。ネパールの首都はカトウマンドゥーですね。カトウマンドゥーから南西、インド寄りルンビニーというところがあります。



「お釈迦様はルンビニーの花咲く園でございまして」と仏典に書いてあります。

いま行ってみますと、茫漠たる原野がずっと続いているんですよ。以前は藪ばかりで虎が出てきたそうですが、この頃はだいぶ開墾されて田畑になっております。とかくのつべらぼうなんです。

ネパールの国だから、ヒマラーヤがすぐ見えるだろうと思うでしょう。とてもヒマラーヤは見えませんが、ネパールに長いこといたら、秋の空の澄んでいるときにはヒマラーヤが見えます。私はちよこちよこ行きでしたが、短期の滞在じゃダメですね。ちよこちよこ外国人が、日本というフジヤマを考えるでしょう。やってきて、「フジヤマが見えなかった」と悲観して帰って行く。それと同じです。ネパールといったら大きな国ですよ。ヒマラーヤは奥のほうにあるんです。わたくしが初めてネパールに行きますときに、あるえらい仏教学者の方が「ネパールに行くのかね。あそこは千葉県ぐらいの広さもあるかね」とおっしゃったんですが、とんでもない。そんな小さなものではないです。本州の半分よりも広いです。

ついでお話ししますが、よその国ではビザをもらって外国に行くでしょう。そのときに、たとえばアメリカならアメリカ合衆国のビザをもらって、そのビザで全国どこへでも行けます。ハワイだろうとニューヨークだろうとテキサスだろうと、どこへでも行けるわけです。ネパールはそうではありません。「ネパールのどこそこの溪谷へ入国するのを許可する」というビザなん

です。カートウマンドウへ行くときは、「カートウマンドウ溪谷への入国ビザ」なんです。ルンビニーへ行くときは、「ルンビニーにお参りするのためのビザ」。行き来はできません。

行き来するのは大変ですね。というのは、鉄道がないでしょう。自動車道路もまだできていません。この頃は拠点を飛行機でつないでいます。そういう国なんです。

ただ、ルンビニーのあたりは沃野がつづいております。インドと区別がつかないですね。地続きなんですよ。国境があることはあります。インドから行きますと、境のところはチェッキングポイント、関所があります。出入国管理です。そこで届けるわけですが、道路がずつとつづいていてところを踏切みたいなので遮っています。日本だと木材が豊富ですから踏切の棒もまっすぐですが、ネパールとインドの国境だと棒がニョロニョロと曲がっています。それが上がったたり下りたりしているのが国境なんです。私たちは手続きしなきゃいけないと思つてそこを通りますが、密入国者はどこからでも行けますね。皆さん、若さにまかせて密入国なんてなさらないでくださいよ。変なところに行くとか、やはり虎が出てくる、蛇が出てくる、狼が出てくる。

そういうところですよ。

釈迦の誕生地ルンビニーは昔は花園だったらしいんです。お釈迦様のお母さんが、自分の実家に帰つてお産をしようとして、そこまでさしかかったときに産気づいて生まれました。それが釈尊、ゴータマ・ブツダであつたというのです。

今、ルンビニー開発計画というのが国連によつてなされております。丹下健三博士がその企画者だそうですね。ルンビニーの近くをアジア横断道路が通るといふんです。それができますと、上海あたりからベトナム、タイランド、ビルマ（ミャンマー）、インドの奥地、ルンビニーのあたりでネパールを通過して、遠くはイスタンブールまで道路がずつとつづくんだそうですね。それができたら情勢は一変しましょうが、今はまだ奥深いところですよ。

生まれに関していえば、ルンビニーはネパール領内ですから、釈尊はネパール人だということになります。釈尊が属していた部族は釈迦族ですが、その釈迦族の住んでいたところは、今まではだいたいネパール領内のティラウラコートだと学者が言つておりました。ところが、最近になって異説が出ました。インド政府の考古学局がその近くのインド領内のピプラーワーとい

うところを掘つてみましたら、そこから釈迦族の住まいであつたということを書いた碑文や遺品がたくさん出てきたということです。

釈迦族の本来本元はカピラヴァストウといふんです。カピラといふのは伝説上の仙人の名前、ヴァストウは「住まい」ですね。そのカピラヴァストウが従来はネパール領内のティラウラコートだということになつていたのに、最近インド政府の側の学者が調査して、インド領内のピプラーワーであると発表しました。

まあどつちでも学者にまかせておけばいい、学問上の論議だ、と皆さまは思われるかもしれませんが、確かにそうですね。しかし、これが国際問題に発展しつつあるので、す。

その理由は、ティラウラコートが釈迦族の住まいであつたとしますと、お釈迦さんという人は根つからのネパール人だということになる。ところが、もしもインド領内のピプラーワーが釈迦族の本拠地だつたということになると、「お釈迦さんという人は本来インド人なんだ。ただお母さんが、ちよつとネパールを旅していたときに生まれたにすぎないんだ」ということになつて、そこで両方とも譲れないわけなのです。

私はネパールの考古学者に会いまして、インドの説をどう思うか尋ねました。「あれは真つ赤なウソだ。デタラメだ」。そうしてネパール側からわたくしのところへ、ネパール領内のテイラウラコートが釈迦族の本拠であったという分厚いパンフレットを、写真入りで送ってよこしましたですよ。はるばる日本のわたくしにまで送ってくれるんだから、他の国にもバラまいておくことでしよう。そうすると今度はインド側ですね。てぐすねひいて待っているわけです。新聞発表によってまた大いにやるという。

つまり、お釈迦様という、歴史的、宗教的に偉大な人物の国籍争いが展開されつつあるのです。本当のところは、学者としてはまだ意見を差し控えます。ピプラーワールでカピラヴァストウ云々という刻銘のあった器なんかが見つかっているといっても、そこでつくられたといえるかどうか。他から持ってきたという可能性だって考えられるわけです。だから、学問的にはどちらかに軍配をあげるといふことは控えたほうが無難だと思います。

ひとつ申しておきたいのは、ネパールとインドとは全然ちがった国であります。これは皆さんがた、心得ておいてくださいま

せ。皆さんがご覧になると、ネパールもインドもセイロン（スリランカ）も大して區別がない、同じような国だと思われる。けれど、彼らにしてみれば敵としたちがいがあるわけです。

うっかりまちがえたりなんかしたら、彼らのプライドを傷つけますから、えらいことになるんですよ。皆さんが外国へいらっしやいますと、「おまえさん、支那人かい。日本人かい。ベトナム人かい。フィリピン人かい」という具合に訊かれるでしょう。彼らにとつては同じなんです。それと同じでしてね。

インドはいま大きな国ですが、共和国です。大統領が治めております。ところが、ネパールは王国です（※講演当時。二〇〇八年に王制廃止）。どこへ行つても王様の写真を飾って、キングキングといっています。王様のことをマハラージャといっています。宗教に関しては、インドは何でもいいのです。政教分離ですから、どの宗教でもいい。けれど、ネパールはヒンドウイズムをもって国教としております（※二〇〇八年の王制廃止とともに世俗国家となった）。むしろ仏教なども認めておりますがね。ネパール人はヒンドゥーのお寺へもお参りするし、仏教のお寺へもお参りする。あまり区

別しないのです。ちやうど日本人が篤く神仏を敬うのと同じですね。

それから、インド人の大部分、北インドの人はアーリアンの子孫です。ルーツをたどると西洋人と同じですね。だいたいコーカサス山脈のあたりから来たのでしょうか。ところがネパール人は、アーリアンの人もいますが、人種的にはアーリアンでない人々が多いです。われわれ日本人によく似ております。チベット人、ビルマ人なんかにも似ておりますね。

その証拠に、私は何度もインドへ行きましたが、インド人だと見られたことは一度もありません。どこから来たかと訊かれると、最初のうちは本当のことを言いましたが、そのうちイタズラ心を起こしまして、「あててごらん」。インド人は私を見て、Are you a Nepalese? あなたはネパール人ですか。「ノー」。Are you a Tibetan? 「ノー」。Are you a Burmese? 「ノー」。Are you a Filipino? 「ノー」。インドネシア人かチャイニーズか。すると、「わからん」と言いますね。戦後すぐのときでした。それでジャパニーズだと言うと、「ああ、そうか。これは失礼した」。ジャパンという国があることは彼らも聞いております。けれど、日本人の現物に会ったことは一度も

ない。彼らの頭にはなかったわけなんだ。

では、仏教の開祖、お釈迦さん、ゴータマ・ブツダはどっちだったか。かつてイギリスのヴェインセント・スミス (Vincent Arthur Smith, 1843-1920) という歴史学者が、釈尊はモンゴリアンであるという説を発表しまして、学会にだいたいぶショックを与えたことがあります。蒙古人。確かに蒙古人と日本人もよく似ておりました。そして蒙古人がチベット人やネパール人と似ております。だから、それもありえないことではない。

ただ、ルンビニーのあたりのタライ盆地は、今日はアーリア人がわりあい多く住んでいるのです。非常にインド的です。そして、仏典に出てくる物語も多分にインド的です。あるいは釈尊という人物はアーリアンの血を受けていたということも考えられます。混血だったかもしれないですね。けれど、現在のところはよくわかりません。わからなくてもかまわないですね。世界にむかって広い教えを説いた、そのもの人でしょう。民族のちがいはなんかに拘泥するわけがないんですよ。

民族宗教というものは民族にこだわります。インドでも、バラモン教からヒンドゥー教にわたるこの線の宗教は、いろいろ

ですが、やはり民族意識があるんですね。インド人のアーリアンがいちばん尊いといっております。他の人種は全部見下すわけです。

マヌ法典という法典があります。それを見ますと、アーリアンが尊い、万民は野蛮人だと書いてあります。その中にヤバナというのがあります。ヤバナというのはギリシヤ人です。イオーニアンが転化してヤバナになりました。それからチーナというのがあります。これはシナ、チャイナですよ。サンスクリットではチーナですね。現代のヒンディー語、ベンガリー語などの言葉では、支那人のことをチーンというのです。これは野蛮人なんです。文化の進んでいる連中も、ぜんぶ野蛮人なのです。アーリアンの文化だけが尊いのです。

インド人の外交官で、ケンブリッジ大学の出身で外務次官をやった人と、三十年ぐらい前に会って話をしたことがあるのですが、たまたまこの人にこう言いました。「古代のサンスクリット語と、英語などのゲルマン語、ラテン語、ギリシヤ語は、もとがひとつだから似ている」。するとこの人は、「インドのサンスクリット語は世界のあらゆる言語のもとである」というのです。これはちよつと言い過ぎなんです。

インド・アーリアンの古い言語をやるのに、サンスクリットが手がかりになるので。学者はそれに基づいて原始インド・アーリアン語を構成するんですが、知識人が本気になって「あらゆる言語のもとである」というんですからね。今度はイギリスのレディに同じことを言ったら怒りましたね。「インド人みたいな野蛮人の言語と比べるとは何だ」。まだまだそういう民族偏見はあるんですよ。

釈迦族のとはよくわかりません。強いていえば、民族の差を越えて考えていいと思います。バラモン教は民族宗教だから民族の優越性を考えますが、仏教は種族の差を越えて教えを説いたわけですから、遠く山を越え海を越えて、はるばると極東の日本にまで到達して栄えています。近年の研究では、仏教が西洋にもかなり伝わっていたことが報告されております。たとえば仏像がイギリスのキリスト教以前のローマ人のお城の中からみつかったとか、カンディナビアに仏像がみつかったとか。どういう意味で仏像をあんなどころに持っていたか、それは知りませんがね。とにかく普遍的な宗教ですから、民族の差は越えているというべきでありましょう。

釈迦族の国王、釈迦族は一種の共和制を

布いていたと考えられるのですが、その中で一番えらい人が王と呼ばれていました。王様の姓は「ゴータマ」といいます。「ゴータマ」というのは「牛」です。英語で牛のことを Cow というでしょう。カウ、クウ。語源的に同じなんです。それから「タマ」というのは「もつとも優れている」という意味です。「ゴータマ」は文字どおりいうと「もつとも優れた牛」、The best cow というわけですね。インド人は昔から牛を大事にしますから、The best cow というのが The best name だったわけですね。それが姓となっているのです。

その王様の家に長子として生まれたわけですが、お父様の名前は浄飯王（じょうぼんのう）というんです。スッドーナ (Suddhodana) というんですが、漢字に訳すと浄飯となります。浄（きよ）らかなご飯、これは白米、銀飯、銀シャリですよ。みなさんはご記憶にないでしょうが、戦時中は白米が最高の貴重品でした。ビール瓶の中に玄米を入れて棒で突くのが精神修養になるからやれといわれたもんです。銀飯、銀シャリは最上のごちそうです。今日でも、日本人にはその觀念が消えさせてないんじゃないですか。

ネパールでも同じなんです。やはりお米

を尊んでいたのです。稲作で、白米のご飯を尊んでいたことがわかります。

インドは白米と麦の両方です。だいたい、ベンガルのあたりですね。ガンジス川の主流から下、それから南インドの川や海の近く、そこは稲作です。ご飯をいただきます。ご承知のようにライスカレーですね。ただライスカレーといっても、ライスはものは少し悪いかも知れませんが、カレーは（辛さが）きついですよ。インド人にいわせれば、日本のライスカレーはライスかもしれないけどもカレーじゃないそうです。インドのカレーはひりひりします。ことに南に行くほどきついですが。ベンガルはわりあい大人しいんですよ。南は暑いですから。麦はガンジス川の中流から上ですね。

デリー大学の先生が大変親切にしてくださったので、「いつか日本へいらっしやいませんか」と言ったのですが、「日本には行きたいけども少しばかり心配な点がある。日本人はお米ばかりいたっている。私はガンジス川の上流で育ったもんだから、麦ばかり食べていてお米は食べない。うっかり日本へ行ったら私は飢え死にするであろう」「いやいやご心配なさいませぬ。この頃は日本人の食生活も変わりましたね。『貧乏人は麦を食え』という言葉が

流行った時代がありますからね」「それなら安心した」といいましたね。そのように、同じインドでも大変ちがうのです。

ガンジス川の中流の少し下のほうからネパールのルンビニーにかけて、稲作が行われておりました。そこで興った宗教が、はるばる日本に到来して日本に定着しました。西のほうへもずいぶん行きましたけども、どうも定着しなかったんですね。これはやはり文化的に、文明的に考えるべきです。

アショーカ王がもつばら力を注いだのは西のヘレニズム諸国です。西へどんどん伝道者を送ったわけですね。使いも送りました。けれども、むこうでは仏教やインド文化が定着しなかった。反対に、東アジアに伝わったのです。

お米のことはウルチと申しましょう。あれはインドから来たろうというのです。インドでウリーヒ (urhi) というのです。お米は仏教以前にインドあたりから海岸を伝わって日本へ来ました。だから、お米を意味する言葉は、東南アジアの海岸沿いにだいたいみんな同じなんです。これは言語学者が考証しております。もとをたどるとインドへ行きます。そのもとがどこだったか、これはまた学者が研究しなければな

りません。仏教が入ってくる以前に、物質面、生活面において南アジアの影響がわが国におよんでいたのです。ということとは、非常に古い時代から、日本は決して孤立していなかったのですね。

その浄飯王の長子としてゴータマ・ブツダが誕生したわけですが、個人名はシツダールタといいます。シツダは「完成した」「成就した」という意味です。それからアルタは「目的」。だから「目的を達成した」「願いを達成した」というめでたい名前です。所願成就ということですよ。

誕生のうち七日でお母さんが亡くなったのです。そこで、お母様の妹、マーブラジャーパティという人がお妃に迎えられました。つまり彼は継母に育てられたのです。いくら小さくても王様の長子ですから、大事に育てられました。仏典の中にこのように書かれております。「私はいとも優しく柔軟であり、無上に優しく柔軟であり、極めて優しく柔軟であった」。つまり、身体が柔弱であり華奢だったというわけですね。これが彼自身の回想として出ております。「あるところには赤い蓮華が植えられ、あるところは白い蓮華、あるところには青い蓮華の花が植えられていた。それらはただ私を喜ばすためになされたので

あった」。

インド人は蓮華をもっとも尊ぶのです。蓮華の蓮池というのがありまして、これがお金持ちの宮殿には必ずあります。その池は真四角なのです。池はくねって自然のかたちがいいという考え方は、日本的ないし支那的な受けとり方なんです。東アジア、インドないし南アジアでは、庭園は真四角でなければいけないのです。左右均整、シンメトリカルです。こういうところも、同じアジアでもずいぶんちがいますね。その真四角の池に蓮華の花を植えています。蓮華の花はインドでは最上の花なのです。日本でいえば国の花、桜にあたりますでしょうか。民族の花です。蓮華は、仏教とともに尊重する気風が日本へ伝わってきたわけです。蓮華というと仏教を思い起こしますね。

だいぶ前の話ですが、私の親戚のうちに軸物がありました。お正月に、この絵はきれいだなあと、思って女の子が蓮華の花の絵をかけたところ、おばあさんが嫌がりましてね。「まあ、元旦早々縁起でもない」。けれども、インドでは蓮華はめでたい花なんです。幸福をもたらす花です。結婚式のときには蓮華の花を飾るのです。だから仏典でも、めでたい花ということで蓮華を尊

んでおります。最上の教えは蓮華に例えられます。だから蓮華経というのです。「南無妙法蓮華経」というでしょう。日本ではねじれた受容の仕方をしていきますから、そういうことになるわけです。お釈迦様は、そういう蓮池のあるところで育ちました。「私はよい香りのするベナレス産の梅檀香以外には決して用いなかった。私の着物はベナレス産のものである」。ベナレスというところはこの時代から織物工業の中心地だったのです。ネパールのあたりでもベナレスの織物というのが最上とみられていました。

「私には三つの宮殿があった。ひとつは冬のため、ひとつは夏のため、ひとつは雨季のためであった」。つまり、冬、夏、雨季、それぞれ宮殿を変えたわけです。「私は決して宮殿から降りたことはなかった。他の人々の屋敷では、奴僕、用人、使用人にはくず米の飯に酸っぱい粥を添えて与えていたが、私の父の屋敷では、奴僕、用人、使用人には、白米と肉との飯が与えられた」。ごちそうを与えていた。豊かな家だったというんですね。

けれど、人間は物質的に豊かであるというだけでは決して幸福は得られません。釈尊はこの生活に満足することができません。

んでした。

そこで、宮殿を出て田舎へ行き、森の木立の涼しいところで静かに瞑想に耽り、じつと思いをひそめていることがあったのです。彼が若いときに実の母を失ったことがあるいは影響しているのかもしれないませんが、もの思いに耽るたちがありました。それから学校へも行きませんでした。学校でも非常に優れた技能を示しました。ただ、どうも物思いに耽る傾向があるもんですから、お父様の王様は心配しまして、妃を迎えさせました。歳がよくわかりませんけども、一説によると十六歳であったといわれております。けれども、妃を迎えてもこの世の生活に満足することができなかつた。ついに意を決して王宮を出て、それで修行者になったわけです。

ひとつには、王家でありまして別に家族は生活に困ることもなかつたから、それで修行者になったわけでしょう。当時は一般に、学問をするためには独身の修行者になるというならわしがあつたのです。日本でも、学問・技術を学ぶためには家族を日本において単身ででかけるということがありましたでしょう。この頃はわりあい日本が豊かになつたから家族づれででかけることが増えてきましたが、昔はとでもそん

なことは考えられなかつたですね。それと似たような事情だつたとお考えいただければよろしい。

そしてお釈迦様は千人を歴訪しているいろと教えを受けました。しかし、満足することができませんでした。あるときは、当時のマガダという国の王舎城という都市を訪ねたのであります。王舎城はガンジス川の中流域にあります。仏典で何々城とありますと都市のことです。カピラヴァストウのこともカピラ城といひます。

日本のお城と大陸のお城は根本的にちがいます。大陸では住民が住んでいます。そのまわりを城壁で取り囲むわけです。なぜかという、異民族がしよつちゅうやってくるでしょう。もし異民族が都市のなかへ侵入したら、その都市の人は皆殺しになりますね。こういう例が中央アジアはいくらでもあるでしょう。自分たちを守るために城壁で囲んだわけです。だから、城というのと都市というのは同じです。

西洋だつてブルク (Burg) なんて場合に似たような例があります。城壁で囲まれている都市を大軍が攻めてどうこうしたなんて話は西洋中世にはいくらでもございます。

日本は全然ちがいます。日本のお城とい

うのは天守閣が真ん中にそびえておりまして、お堀があります。あの中にはお侍だけが住んでいたんですね。つまり、あそこにはいたのは支配階級だけです。一般民衆はお城の外に住んでいました。だから「城下町」というのです。

城下町なんてものは西洋にはないわけですね。西洋だつたら、危険にさらされたら生命が脅かされます。ところが日本は、武の国、侍の国といひますが、武勇を發揮したのは支配階級だけです。民衆がバツサリやられるということは日本ではなかつたのです。

日本は単一民族でしょう。言葉が同じですね。宗教もだいたい似たりよつたり。顔の色を見ても、骨格を見ても、ちよつと見ただけじゃ北の人と南の人の区別がつかせせん。多少方言のちがいがあつても、日本中どこへ行つても標準語で通用します。

そういう国では、戦争といつても支配階級だけに限られていました。民衆は殺されることがなかつたので、お城の外に住んでいます。ただ支配階級だけがしよつちゅう変わつていたわけです。だから日本では文化財がよく保護されていますね。大陸以上に保存されております。

日本人はだいたい、信頼関係において人と人とのつきあいが成り立っていますね。日本の家屋というのは襖とか障子だけでしよう。鍵をかけるというのは日本人はあまりやりませんわね。西洋人の生活ではひとつひとつ鍵を閉めるのはご承知のとおりです。インドだってそうですよ。インド人の生活と日本人の生活は同じアジア人でもちがいます。

私はマヘンドラ・プラタップという王様を訪ねていったことがあります。この王様は戦時中にチャンドラ・ボースと並んで日本側についたんですね。それで戦争犯罪人に指定されました。けれど、インドの法廷は彼を無罪にしました。なぜかというところ、祖国の独立のために外国と手を握るというのは何も悪いことじゃない、ということなんです。この人はインド独立のために戦ったので無罪になったのです。

その王様を私は訪ねたんですが、歓迎してくれました。これからお茶をもてなしてくれるときに、私にむかって王様が、In India, you should not といって言葉を切ったわけです。「インドではこんなことをしてはいかん」。何か礼儀に反したことをしたかと思ったら、こうなんです。「あなたは暑いからここに上着を脱いでかけ

た。それでむこうの部屋へ行こうとする。インドではそんなことをしてはいかん」というんです。「必ず持っていかなければならない。日本では、上着をおいておいても中の財布を盗まれることはないんだが」とこういわれる。日本では同じ家の人のあいだでは信頼関係がありますから、盗まれるということはありません。いちいち他の部屋に行くからって鍵をかけるようなことはしないですね。ところが、インドではそれはいけないのです。王様はこんな大きな鍵の束を持っているんですよ。それでいちいち櫃(ひつ)や金庫を開けているんです。日本人のつきあいは信頼関係の上に成り立っていて、民族的規模においてもお互いに殺しあうというようなことはなく、支配階級だけが争っていました。だからお城の構造がちがうわけです。インドの場合には、都市全体が城になるのですね。

マガダの国というのは当時いちばん強かった国ですが、首都を王舎城といいます。マガダの国は一面にのっぺらぼうの平野が続いているのですが、王舎城のところだけ山に囲まれています。おそらく昔の噴火口だったと思うんですが、その証拠に北の出口に温泉があります。インドには温泉はほとんどありません。地震もないのです。

日本は火山の多い国で、昨日今日のように地震も多うございましょう。だから温泉がいっぱいあるんですね。インドで温泉があるのはそこだけです。そこを訪れたとき、「せっかくインドの伊東に来たんだから入っていきましょよ」と勧めた人がいましたけど、入りませんでした。同行した若い人には入った人もいるそうですが。

山に囲まれたマガダの首都、そこへゴータマ・ブツダはやってきた。当時の最新の知識がそこにあつたから、それを学ぼうというつもりだったのです。すると、マガダの王様はお釈迦様を引見して、「ああ、遠くから優れた人がくるようだ。彼に会いたい」。そういう話が仏典に伝えられておりますが、それで呼び寄せました。

「あなたは王様の長子である。栄華を極めることができる人なのに、こんなにみすばらしい修行者になって惜しいことだ。あなたに財宝を与えよう。あなたにたくさんの象を与える。だから早く国へ帰れ」。仏典にそう書いてあります。

これも当時の文化誌を分析しないとよくわかりません。「あなたに財宝を与える」というのは、当時のインドは通貨もないことはなかったのですが、今日でもインド人は通貨に対する信頼が少ないのです。その

代わり、インド人は昔から宝石を買います。宝石をどうするか。金庫の中に入れておいても危ないでしょう。いちばん安全な保管法は、金貨に相当する宝石を身につけることです。手や腕に宝石をいっぱいつけているでしょう。髪飾り、鼻飾りにしているのがありますね。かんざしに宝石をつけたり、これが彼らの銀行預金なのです。どこへ逃げるのでも、それだけ持っていればよい。

日本では国家の秩序がよく保たれていますから、みんなが銀行へ預けるわけです。インド人は銀行を信用しませんからね。インドの銀行はなかなか発展しません。その代わり、自分の身につけている銀行がどんな栄える。金に困ったらひとつずつ銀行預金を取りだして売る。それで暮らしていきます。

ですから「財宝を与えよう」というのは、「あなたに経済援助をします」ということなのです。マガダ、当時の最強の国の王様が積尊に経済援助を申し出たのです。

それから、「あなたに象を与える」。象というのは、動物園で見るとは象ではありません。当時、象というのはもっとも強い武器でした。軍隊で象軍を使うということです。象を持つことは王様だけが許されていきました。アレクサンダーや、そのあと

もギリシャ人の帝王がインドに攻めてまわりますが、インドの軍隊の何に悩まされたか。象軍を持っているということなのです。

まず戦争が始まる前に、象にうんと酒を飲ませるんですよ。酔わせておきまして、尻を打つわけ。そうすると、象は敵陣めがけてうわーつと行くわけです。ギリシャ人の軍隊をみんなやつつけちゃう。ただそのとき用心しませんと、味方の軍隊まで踏みつぶす（笑）。

ギリシャ人の王様は「これは大変だ」というので、象軍を西洋でも導入しようと思いました。シリアのセレウコス・ニカトールという王様は戦争で象を使って大勝利を博しました。それを真似して、ハンニバルがピレネー山脈を越えてローマへなだれこんだとき、象軍でもつてうわーつとなだれこんでいます。今も、ひとつの国が原子爆弾を発見しますと、他の国が争って真似してつくるでしょう。強い武器だから。古代だって同じことなんですよ。

したがって、お釈迦様にむかって王様が「象を与えます」といったのは、軍事援助するといったのです。そうして、釈迦族とマガダとで、あいだにあるコーサラという国を挟み撃ちしようという計画したのです。

ところが、積尊はそれを断りました。「この世の帝王になるつもりはない」といったのです。「自分は真理の帝王になる」。

真理の帝王のことを「法王」と申します。ダルマ・ラージャといいますが、仏典では法王と訳されており。今日になりまして、法王という言葉がだいたい変な意味になります。ローマ法王（教皇）とか、果ては日本銀行総裁のことだとかいいますが、もとの意味はそうじゃないんですよ。「真理を体得しているこの世の王者」という意味です。みすばらしいんですよ。それが「法王」です。法王であらねばならんのです。それで積尊は「真理の道を進む」といったのです。

同じマガダの、今日ではブツダガヤと呼ばれるところに大きな菩提樹があります。その菩提樹はサンスクリット語でアシユバツタというのですが、昔のリグ・ヴェーダ（聖典）以来、神聖な呪力のある木と思われていました。積尊はその木の下で静かに瞑想に耽ったというんです。そうして悟りを開きました。

何を悟ったか。これは仏典の中でいろいろに説かれておりまして、どれだということが決めにくいのです。同時に、どれであってもかまわないのです。つまり、真理を

悟りました。人間の真理を言葉で説くと教えになります。それは無限に展開するものです。ですから、後代の人が自分の受けとったかたちで伝えてまいります。そこで教えができ、教えが書き記され、あの『大蔵経』一万三千巻あまりになるわけですね。

歴史的な釈尊の教えというものは、だいたいパーリ語で伝えられた聖典の中に残っているだろうといわれておりますが、その中でも特に古い『スツパニパータ』が、最初期の簡素な仏教の生活の教えを伝えております。実践倫理に関しては『ダンマパダ』、真理の言葉と申しますが、これは非常に人々に教えることが多いもので、南アジアでも西洋でもよく読まれております。初期の仏教の思想を伝えているものがあります。

その後は、遍歴行者として教えを説く生活が始まります。最初に教えを説いたのはベナレスの郊外の鹿野苑（ろくやおん）というところです。

ベナレスはさつき申しましたように織物工業の中心地ですが、同時に昔から神聖な宗教上の聖地とみなされております。きょう皆さんがベナレスへいらっしやいますと、お寺がずっと並んでおり、ベナレスの川べりで飛びこんでジャブジャブやっ

ておりましょう。水がきれいなときばかりでなくて、泥がまじった濁った川でバチャバチャやっておりますね。

仏典では、あんなことをして何の功德があるのかと批判しているんですよ。「ガンジス川の水が清らかなものなら、あそこに棲んでいる魚や亀の類がもつとも功德を積んでいることになる」と皮肉っております。けれども、インド人は昔からやっておりますね。「死ぬまでに一度ベナレスへお参りしたい。もしお参りできなければ、末期の水としてガンジス川の水を綿でひたして口へ含ませる」と申しまして、ガンジス川のあの汚い水を買っているんですよ。ハンダづけの甕で売っているものだから、私も二つほど買ってきました。ご希望の方に見せてあげたいですけども（笑）。そういうようなところなんです。昔から宗教上の霊地なのです。

鹿野苑というところはその郊外にあります。ここはいま行ってもきれいなところですよ。実に美しい芝生が敷きつめられておりまして、まわりの樹木も美しい、いいところですね。釈尊の時代にも行者が集まるところだったようです。釈尊は、彼を捨てた友人が五人ほどそこにいたので、そこへ行って自分の悟った内容を説き、彼らを

教化した。ここから仏教教団というものが出発する。そういわれております。

昔は鹿がいたんですね。私が最初に行きましたのは戦後すぐでした。鹿はおりました。二回目に行ったら、鹿が二頭いるんです。「あら、このまえ来たときいなかったのにどうしたんだ」「鹿の園というんだから、観光客を喜ばすために他から連れてきたんだ」と言っていました。去年行ったときは鹿は見えませんでしたね。どこか行ったんでしようか。いいところです。そこから出発して、仏教教団が発展します。

インドでは、雨季のときは猛烈に雨が降るから旅なんかできません。雨季は定住して、それ以外はずっと裸足で歩いて教えを説きました。最後に、齢八十にしてマガダの王舎城を發つて、生まれ故郷にむかって旅をします。インドは広いですからね。生まれ故郷まで帰るといったって容易なことではありません。

どうして齢八十にしてインド第一の都を去って、生まれ故郷へ向かったか。この理由はわかりませんが、教団も大きくなつて、お弟子たちにすべて譲ってしまいました。人間は歳をとって死が近づいてくると、生まれ故郷を思い出しますね。生まれ故郷へむかって旅をして、故郷にたどりついて

死にたいという気持ちがあつたのではないでしようか。その旅路を記した経典が残っております。『マハー・パリニツバーナ・スッタタ』といひます。

当時のハイウェイに沿つて北にずっと進んでいくんですが、途中でチュンダという鍛冶屋さんにごちそうされます。それにあつて病気になるました。病気になるつてもなお旅を続けていきます。

大きな都会を通ります。ヴァイシャーリーという当時の商業都市です。その商業都市を去つて、峠の上からヴァイシャーリーの都市を振り返つて感想を述べます。

サンスクリット本によりますと、釈尊の感想は「この世界は美しいものだし、人間の命は甘美なものだ」。漢訳によりますと、「この世界の土地は五色もて画いたやうなもので、人がこの世にうまれたならば、生きていくことは楽しいことだ」。人が死ぬときにこの世の名残を惜しみ、死に際して今さらながらこの世の美しさと人間の恩頼に打たれる。それがまた人間としての釈尊のありのままの心境でありました。「わが齢は熟した。わが余命はいくばくもない。汝らを捨てて私は行くであろう。ひとり去つていくであろう。私は自己に帰依することにした。修行僧らよ、汝らは精励

にして正しく気をつけ、よく戒め、思惟によつてよく心を統一し、おのが心を守れよ。この法と律とに精励するであろうもの、生の流転を捨てて苦しみの終末をめざすであろう」。

そして旅をつづけていくんですが、だんだん疲れてまいります。師は道から退いて、一本の木の根元に近づかれました。そして侍者のアーナンダに言いました。「さあアーナンダよ、おまえは私のために上着を四重にして敷いてくれ。アーナンダよ。私は疲れた。私は座りたい」。命ぜられたとおりにしました。それから師はまた言った。「さあアーナンダよ。私に水を持ってきてくれ。私は喉が渴いている。私は飲みたいのだ」。

パーリ語の聖典には釈尊の人間的な姿がよく出ているのです。後代の仏典になると、だんだんこういうところが消されてしまふんですね。喉が渴いてしょうがないから水が飲みたい。そういうところは消えて、神様みたいに描いてしまふのです。

最後にクシナガリーというところ、ルンビニーの近くですが、ここまでたどりついて夜中に亡くなったといわれております。今日でも場所がありまして、塔などが建てられております。国境に近いところです。

亡くなってから遺骨を茶毘に臥して、それを八つの部族が「私のほうにください」と争つたもんだから、八つに分けました。それぞれの部族が塚をつくつたといひます。ストウーパと申します。そのうちのひとつが、ネパール国境に近いピプラーワールでみつかりました。

そのお骨を入れた容器はカルカッタの博物館に保管されております。館長さんがけが部屋の鍵を持っていて、平生は見せないのです。中のお骨は仏教徒であるシャムの王室に渡されました。その一部分がわが国の仏教徒に与えられまして、今日、名古屋の覚王山日泰寺というお寺に安置されております。あのお寺は八宗輪番で、仏教諸派で大切に守るといふことになっております。

いろいろなことを申しあげましたけども、以上が人間釈尊ゴータマ・ブツダの生涯のあらましでございます。

鐘が鳴っておりますから（※近隣の東京カテドラル聖マリア大聖堂の鐘）、これで終わることにいたします。どうも長いことご清聴いただきまして、ありがとうございます。皆様の健康とご幸福を祈っております。（拍手）